(トップページ：http://mylibrary.maeda1.jp/)
(五大石油会社の業績比較：http://mylibrary.maeda1.jp/SuperMajors.html)
(ブログ「石油と中東」：https://blog.goo.ne.jp/maedatakayuki_1943)
マイライブラリー：0512

(注)本稿は 2020 年 8 月 7 日から 28 日まで 12 回に分けて「ブログ・石油と中東」に掲載したレポートをまとめたものです。

2020.8.31
前田　高行

コロナ禍で大幅な減収・減益：五大国際石油企業 2020 年 4-6 月期決算速報

スーパーメジャーと呼ばれる五大国際石油企業(ExxonMobil、Shell、BP、Total 及び Chevron)の4－6月期決算が相次いで発表された。ここでは売上高、利益（総合、上流部門、下流部門）、売上高利益率、設備投資、石油・天然ガス生産量及びキャッシュ・フローについて各社を横並びで比較するとともに過去1年間の四半期決算の推移を検証する。

決算の詳細は以下の各社のホームページを参照されたい。
ExxonMobil：
https://corporate.exxonmobil.com/News/Newsroom/News-releases/2020/0731_ExxonMobil-reports-results-for-second-quarter-2020
Shell：
https://www.shell.com/media/news-and-media-releases/2020/second-quarter-2020-results-announcement.html
BP：
https://www.bp.com/en/global/corporate/news-and-insights/press-releases/second-quarter-2020-results.html
Total：
https://www.total.com/media/news/press-releases/second-quarter-2020-results
Chevron：
https://www.chevron.com/stories/chevron-announces-second-quarter-2020-results

なお過去の四半期業績及び2010年から2019年までの通年の業績比較は下記レポートを参照されたい。
http://mylibrary.maeda1.jp/SuperMajors.html

目次　　頁

1．五社の4－6月期業績比較
（1）概要　3
(2)売上高　3
（3）総合損益　4
（4）売上高利益率　5
（5）上流部門の利益　5
（6）下流部門の利益　6
（7）設備投資　6
（8）原油・ガス生産量　7
2．2019年第2四半期以降の四半期別業績の推移
（1）売上高の推移　7
（2）利益の推移　8
（3）売上高利益率の推移　9
（4）部門別利益の推移
（4－1）上流部門　10
（4－2）下流部門　10
（5）設備投資の推移　11
（6）原油・天然ガス生産量の推移
（6－1）原油生産量　11
(6－2)天然ガス生産量　12
(6－3)原油・点何ガス合計生産量　12

（付）国際石油企業3社(Shell、BP 及び Total）のキャッシュ・フロー
1．まえがき　13
2．2020年第2四半期のキャッシュ・フロー　14
3．2019年1月以降のキャッシュ・フローの推移
3－1．営業キャッシュ・フロー　14
3－2　投資キャッシュ・フロー　15
3－3　財務キャッシュ・フロー　15
3－4　キャッシュ・フロー期末残高の推移　16

1. 五社の4－6月期業績比較

(売り上げは前期比5割減、前年同期比6割減、100億ドル規模の欠損！)

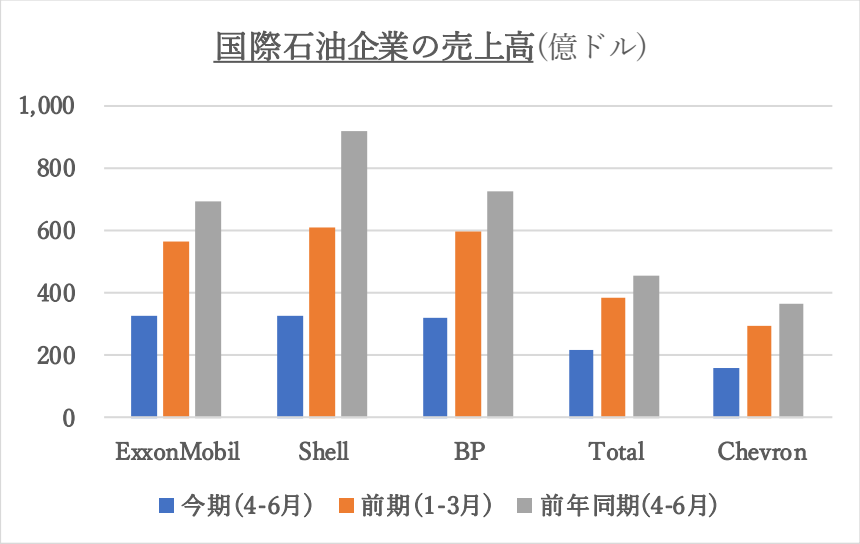
(1)概要(末尾表 1-D-4-22 参照)

年初から吹き荒れたコロナウィルス禍が世界的な景気後退をもたらしており石油業界もその影響を受けている。国際石油企業五社の場合、需要の減退及び石油・天然ガス価格の大幅下落により、4－6月期の売り上げは昨年同期の半分以下、前期(1-3月)に比べても4割前後落ち込んでいる。また損益も今期は全社がマイナスであり、Shell のように200億ドル近い欠損を計上した企業もある。さらに設備投資、石油・天然ガスの合計生産量も全社が昨年同期を下回っている。

各項目について五社を横並びで比較した場合、売上高、設備投資、原油生産量及び原油・天然ガス合計生産量ではExxonMobil がトップであり、損益も五社の中では損失が最も少なく、したがって売上高利益率トップである。これに対して上流部門の損益は全社がマイナスの中で、Total が損失額が最も少ない、また下流部門の損益は5社中3社がプラスであり、BP が最も利益が多い。Shell は天然ガスの生産量が五社の中で最も多い。

(原油価格の下落との高い連動性！)

(2)売上高



2020年4－6月期の売上高は前年同期(2019年4-6月期)に比べると各社とも6割前後の減収であり、前期(2020年1-3月期)と比較しても5割近い大幅な減収であった。例えば売上高がもっとも多かったExxonMobil の今期の売上高は326億ドルであったが、これは前年同期(691億ドル)の半分以下であり、前期(562億ドル)に比べ42%減である。

Shell の今期の売上高325億ドルは対前期比▲47%、対前年同期比▲65%であり、また BP(売上高317億ドル)は対前期比▲47%、前年同期比▲56%である。同様に Total 及び Chevron は売上高が216億ドル及び159億ドルであったが、両社は対前期比▲44%、▲46%あるいは対前年同期比▲52%、▲56%であった。

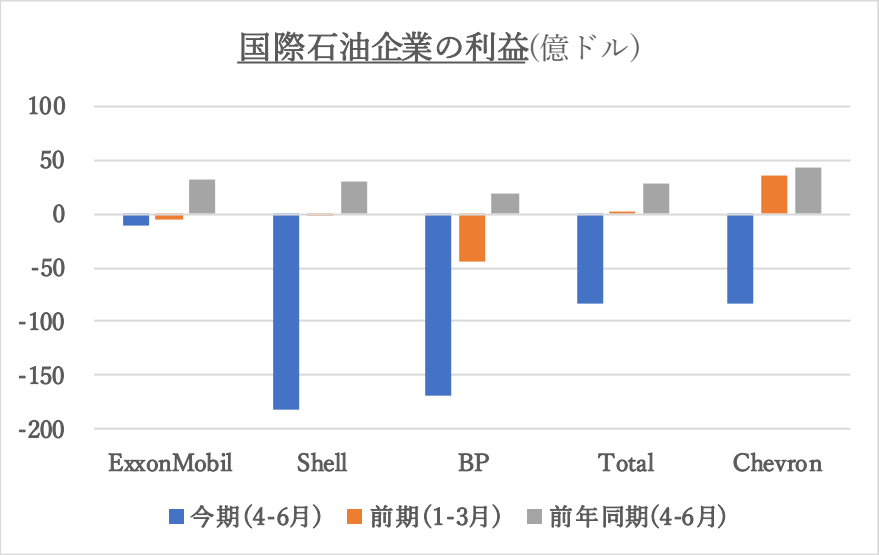
このように5社すべてで前期あるは前年同期に比べほぼ同程度に減収となった理由は、冒頭に述べた通りコロナウィルス禍により世界景気が大幅に悪化、石油・天然ガスの需要及び価格が大幅に下落したためである。

エネルギー需要の減少は後述する各社の原油・天然ガス生産量がほぼ全社で昨年同期を下回っていることに表れている。また価格については Shell の決算付属資料で見ると、Brent 原油の今期平均価格は29．55ドル/バレルであった。これに対して前期(1－3月)の平均価格は50．06ドル/バレルであり、前年同期(昨年4-6月)のそれは68．86ドル/バレルであった。今期の価格は前期比▲41%、前年同期比▲53%である。同様に WTI 原油価格で見ると前期比▲39%、前年同期比▲53%で Brent 原油とほぼ同じ傾向を示している。さらに天然ガスの価格を Henry Hub 建てで見ると、今期の価格は前期比▲13%、前年同期比▲34%である。

これらの事実から、今期の売上高の減少は原油価格との連動性が極めて高いことがわかる。

(全社赤字決算、Shell、BP は150億ドル以上の欠損！)

(3)総合損益



今期は大幅な売上高の落ち込みに加え五社すべての損益は赤字に転落した。前年同期は五社すべてが20乃至40億ドルの利益を計上しており、また前期(1－3月期)は BP 及び ExxonMobil が赤字でその他3社は黒字であった。これに比べ4－6月期は損益が急激に悪化したことがわかる。

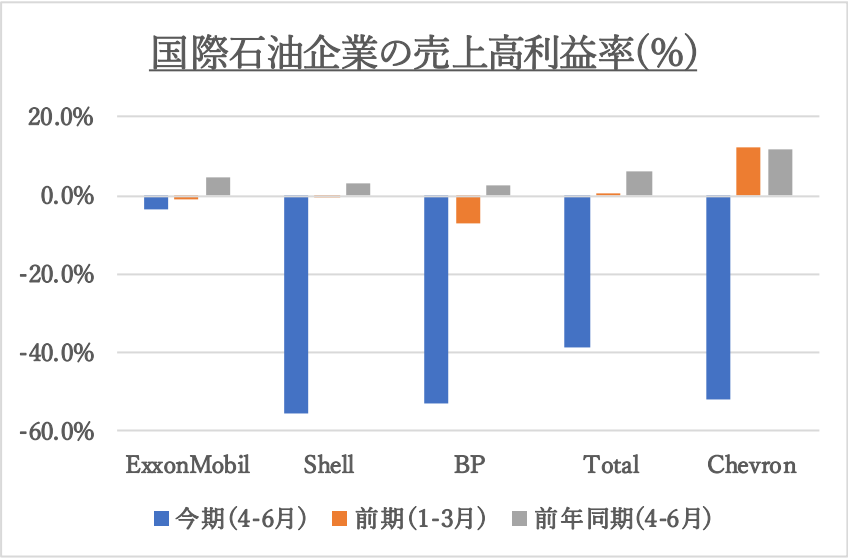
各社ごとに比べると、ExxonMobil の今期の損失は▲11億ドル、Chevron 及び Total は共に▲80億ドル強、BP▲168億ドルであり、Shell は5社の中で最も悪い▲181億ドルの欠損であった。5社の中では ExxonMobil はマイナスを抑え比較的傷の浅い決算数値である。これに対して Shell は前年同期あるいは前期から一転した巨額の赤字を計上している。また BP は前期の▲44億ドルの赤字に続き今期はさらに4倍近い168億ドルの損失を計上している。

Total 及び Chevron もそれぞれ▲84億ドル、▲83億ドルの欠損であり、Chevron の場合は前年同期、前期にそれぞれ43億ドル、36億ドルの利益を計上したのが一転して欠損となっている。

Shell、Total など4社が大幅な赤字を出した原因は不良資産を減損損失として今期の決算に反映したためであり、例えば Shell の場合調整済みの純利益は6億ドルであり、また Total の場合は減損

損失額は81億ドルであると説明している。

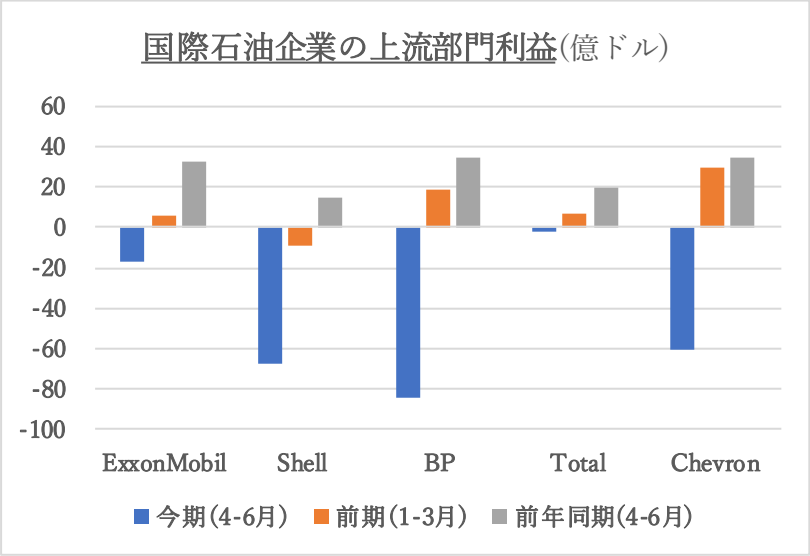
(4)売上高利益率



今期の売上高利益率は ExxonMobil が▲3.3%と、5社の中では最もマイナスが低かったのに対し、他の4社は Total が▲39%に達し、Chevron、BP、Shell の3社は▲52%、▲53%、▲56%といずれも大幅に落ち込んでいる。いずれの企業も前期あるいは前年同期と比べ極端に沈み込んでいる。BP では10年前のメキシコ湾原油流出事故以来の配当減額を決めている。このように国際石油企業各社は資産の再評価で減損損失を計上することにより財務体質を強化し、今期決算を犠牲にして今後の業績反転を狙っているが、コロナ禍の影響がいつまで続くか、またポスト・コロナ後の石油・天然ガス産業がどのように変化するのか不確定要素が多い。今期の業績が底となり、かつての高収益を取り戻すことができるか否かは未知数であると言わざるを得ないであろう。

(上流部門は対前年同期比で全社減益！)

(5)上流部門の利益

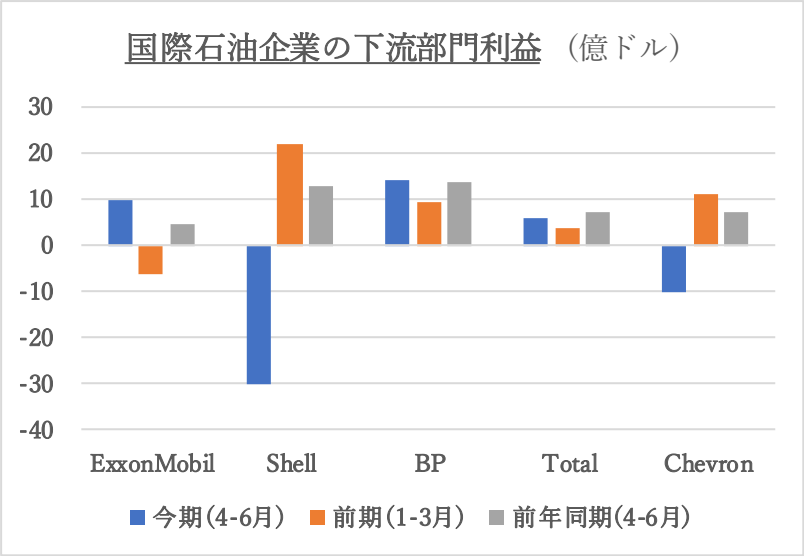


利益を上流部門(石油・天然ガスの開発生産分野)と下流部門(石油精製および製品販売分野)に分けて比較すると、まず上流部門は5社いずれもが赤字である。前期は Shell1社を除く4社が黒字であり、また前年同期は5社すべてが黒字であったことと比較すると、今期の業績悪化は極めて顕著である。しかもBPの▲85億ドルを筆頭に、Shell, Chevron 両社も60億ドル台の赤字である。ExxonMobil は▲17億ドルであり、もっとも赤字が少なかったのは Total の▲2億ドルである。Shell はポストコロナを見据えて石油・天然ガス鉱区の売却など上流部門の資

産圧縮による減損損失を計上しており、BPも今後数年間で石油・天然ガスを大幅に減産し、再生可能エネルギー開発に傾注することを表明している。

（3社が利益計上するも上流部門の損失カバーできず！）

（6）下流部門の利益



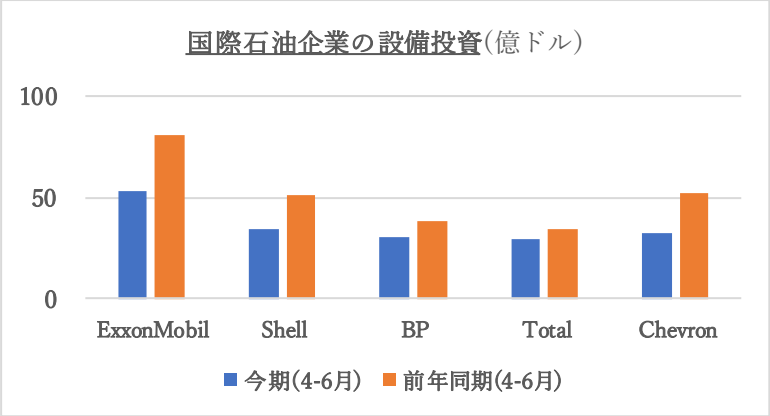
一方下流部門の利益が最も多かったのは BP(14億ドル)で前年同期比とほぼ同じである。これに次ぐ ExxonMobil は10億ドルの利益を計上している。Total も6億ドルの利益であったが、Chevron 及び Shell の2社の下流部門は損失を計上、Shell の赤字は5社で最も多い▲30億ドルである。Shell は上流部門でも多額の赤字を計上している。

これまで国際石油企業は原油価格が安く上流部門の利益が出ないときは、安い原油を精製する下流部門が利益を計上、逆に原油価格が高い時は、下流(精製)部門が低収益、上流部門は高収益となり、相互に損益を補い合う構図であった。しかしコロナ禍の今期は原油価格が低迷し消費国の需要も落ち込んだため、上流部門が大幅な赤字となり、さらに下流部門も製品価格が低迷し操業率も低下したため利幅の薄い低収益(または赤字)を強いられた。

なお上記（2）総合損益は各社によって石油化学品部門あるいはその他の損益を含むため上・下流部門の利益の合計額とは一致しないケースがある。

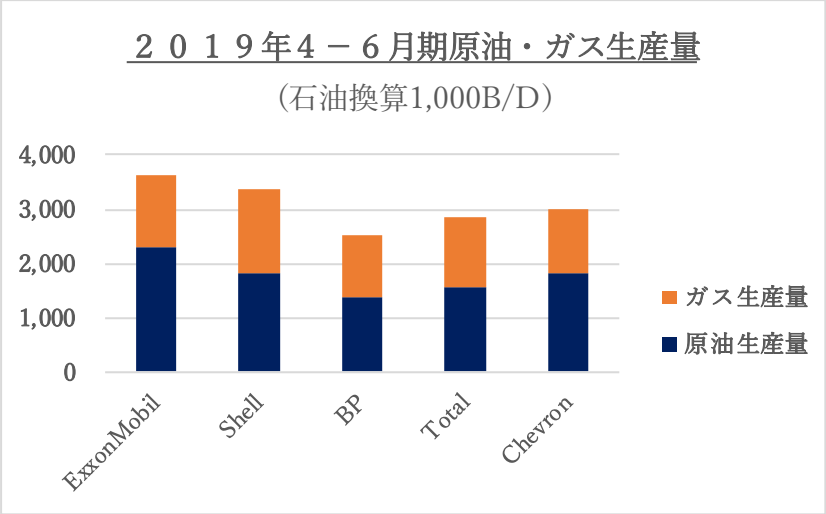
（4社が30億ドル前後、前年同期比では最高▲37%減！）

（7）設備投資



2020年4－6月期の設備投資額が最も多いのは ExxonMobil の53億ドルであり、その他の4社はいずれも30億ドル前後である。全社で前年同期の水準を下回っており、Chevron▲37%、ExxonMobil▲34%、Shell▲33%と各社とも大きく減少している。

(7) 原油・ガス生産量



今年4－6月の原油生産量はExxonMobilが平均日量231万バレル(以下B/D)で5社の中では唯一200万B/Dをこえている。その他の4社はいずれも200万 B/D 未満で Chevron、Shell(共に182万 B/D)、Total155万 B/D である。BP の原油生産量は5社の中で最も少ない137万B/DでExxonMobilの6割弱にとどまっている。前年同期と比較すると BP は5%増加しているが、その他の4社は前年同期を下回っている。ExxonMobil の場合前年同期は239万 B/D であり、4%の減少である。

天然ガスの生産量は Shell が最も多い日産90億立方フィート(以下 cfd)であった。第2位の ExxonMobil は80億 cfd、残る Total、Chevron は70億cfd前後であり、最も少ないのは BP の67億 cfd である。5社すべてが昨年同期の生産量を下回っており、ExxonMobil、BP、Shell3社は二桁台の大幅な下落である。因みに Shell は昨年同期には5社で唯一100億 cfd を超えていた。

天然ガスを石油に換算した原油・天然ガスの合計生産量では ExxonMobil は364万 B/D でこれに次ぐのが Shell の338万 B/D である。その他の各社はいずれも300万 B/D を下回っており、Chevron 299万 B/D、Total 285万 B/D、BP 253万 B/D である。前年同期比では5社すべてが下回っており、ExxonMobil は391万 B/D→364万 B/D へ6. 9%減少している。

石油と天然ガスの比率を見ると、ExxonMobil は石油63%、天然ガス37%であり5社の中では石油の比率が最も高い。他の4社も石油の比率が天然ガスを上回っており、Chevron は石油61%、天然ガス39%である。

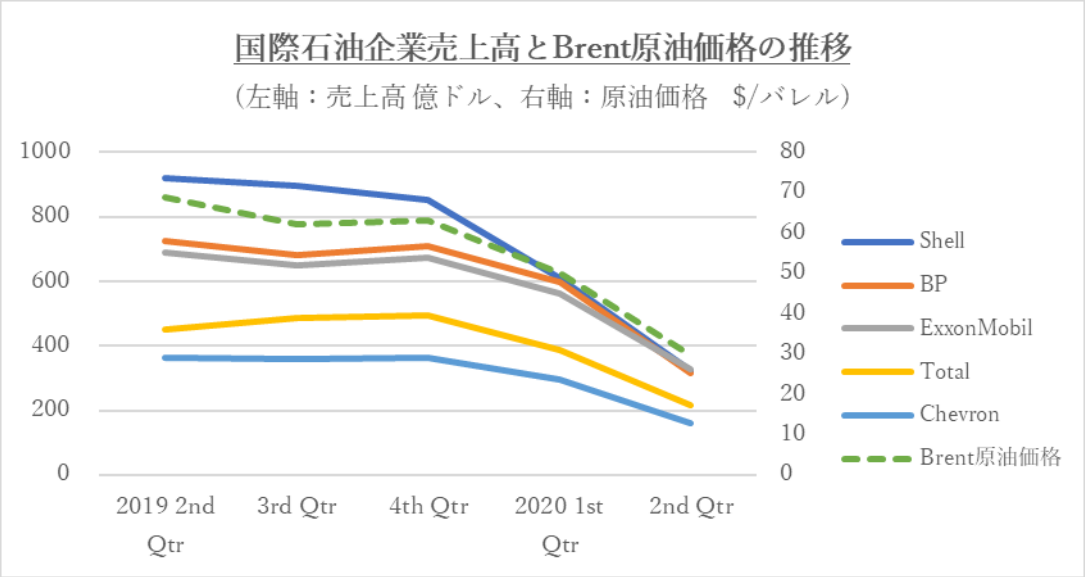
2. 2019年第2四半期以降の四半期別業績の推移

五社の売上高、利益(全体、上流部門および下流部門)、設備投資、原油・天然ガス生産量に関する2019年第2四半期以降今期までの四半期ごとの業績推移は以下の通りである。

(8) 売上高の推移

2019年第2四半期から2020年第2四半期に至る四半期ベースの売上高の推移を見ると各社とも昨年第2四半期以降売上高は期を追うごとに減少している。2019年第2四半期の売上が最も大きかったのは Shell の918億ドルであり、Shell に次ぐ BP の売上高は727億ドルで約200億ドルの差があった。第3位以下は ExxonMobil(691億ドル)、Total(452億ドル、Chevron(363億ドル)であり、

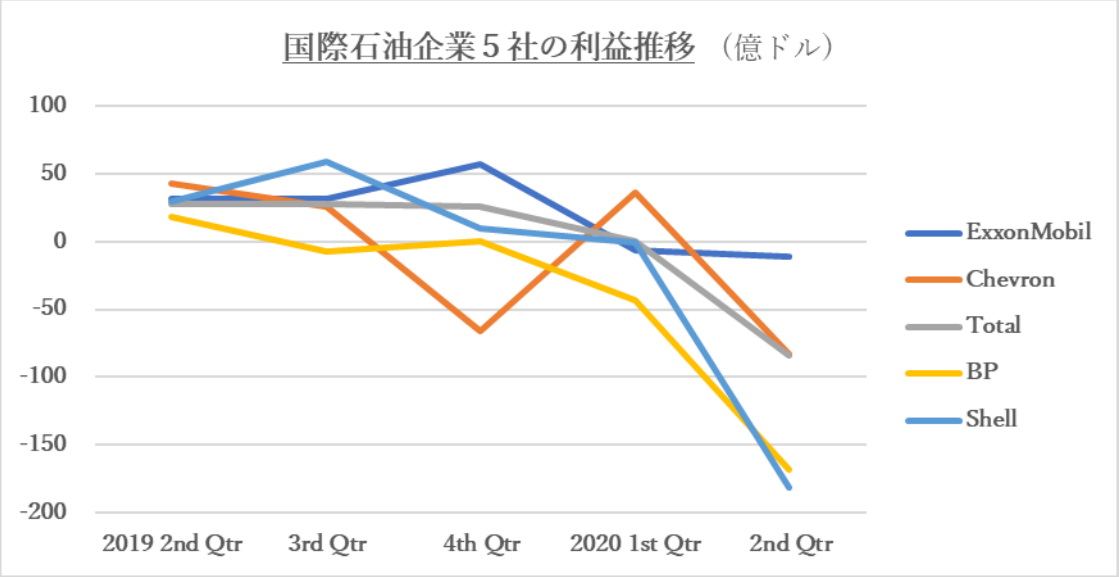
5社の順位はその後4期連続して変化がなかった。



しかしトップの Shell は昨年第4四半期以降急激に売り上げが減少、今年第1四半期は Shell と BP の売上高はそれぞれ610億ドル、597億ドルとなり大差がなくなった。さらに第2四半期にはこれら3社を含めいずれも50%近い減収となり、ExxonMobil が売上高326億ドルで Shell の325億ドルをわずかに上回り、BP(317億ドル)と3社が拮抗している。第4位は Total(216億ドル)、最も少ないのは Chevron の159億ドルであった。

過去1年間の売上高減少の主たる理由は原油価格の下落である。この間の Brent 価格の四半期平均価格を Shell の決算付属資料で見ると、69ドル/バレル('19 2nd Qtr)→62ドル/バレル('19 3rd Qtr)→63ドル/バレル('19 4th Qtr)→50ドル/バレル('20 1st Qtr)→30ドル/バレル('20 2nd Qtr)と下落しており、5社共に価格の下落傾向と売上高の減少が軌を一にしており、特に BP と ExxonMobil は価格の下落曲線と全く同じ軌跡をたどっている。

(2)利益の推移



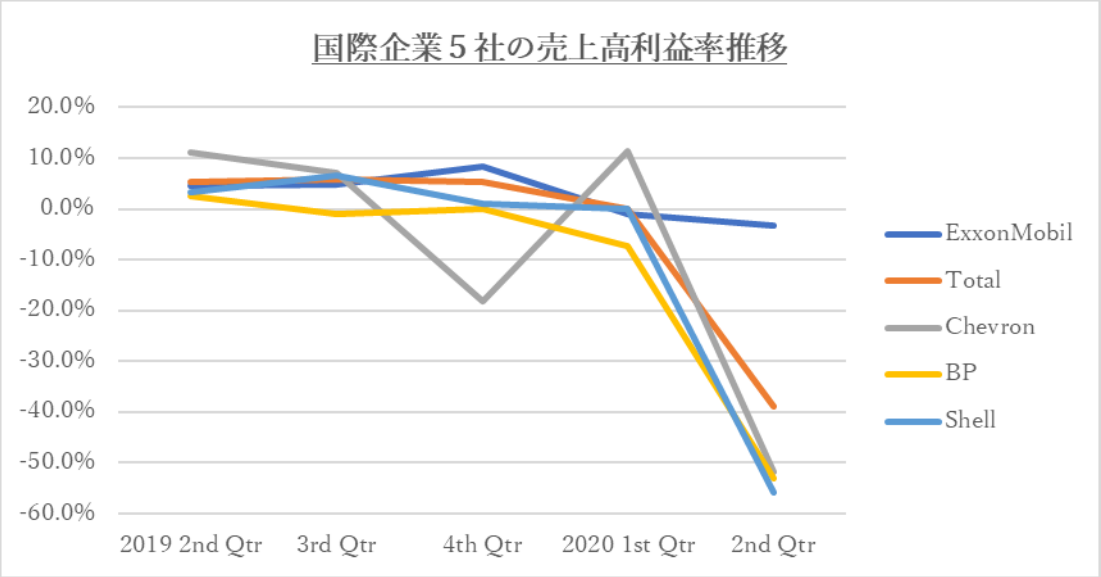
過去1年間の四半期ごとの利益水準は各社とも大きく変動している。特に今年第2四半期は5社

すべてがマイナス決算になり、ExxonMobil を除く4社、中でも Shell と BP は共に▲150億ドルを超える巨額の欠損を計上している。

昨年第2四半期の利益は Chevron の43億ドルを筆頭に、ExxonMobil31億ドル、Shell30億ドル、Total28億ドル、BP18億ドルと全社が利益を計上、さらに各社の利益格差も比較的小さかったが、次の第3四半期になると Shell の利益が59億ドルに拡大する一方、BP は▲7億ドルの欠損を出し、また第4四半期には ExxonMobil が Shell に替わってトップの57億ドルの利益を計上、Chevron は▲66億ドルの大幅な損失を出している。さらに今年第1四半期には Chevron が前期のマイナスから一転して36億ドルの利益を計上、Total と Shell は収支トントンであり、BP と ExxonMobil はマイナス決算に転落した。

そして今期(20年第2四半期)は先に述べた通りコロナ禍による油価下落、需要減退が重なり5社すべてが赤字に転落している。ExxonMobil は▲11億ドルで比較的傷は浅かったが、Chevron と Total は80億ドル強の欠損となった。とくに BP と Shell の赤字はそれぞれ▲168億ドル、▲181億ドルの巨額の赤字を強いられている。

(3)売上高利益率の推移



1年前の昨年第2四半期の五社の利益率は Chevron が11．1%と最も高く、次いで Total 5．4%、ExxonMobil 4．5%、Shell 3．3%と続き、BP は最も低い2．5%にとどまっている。

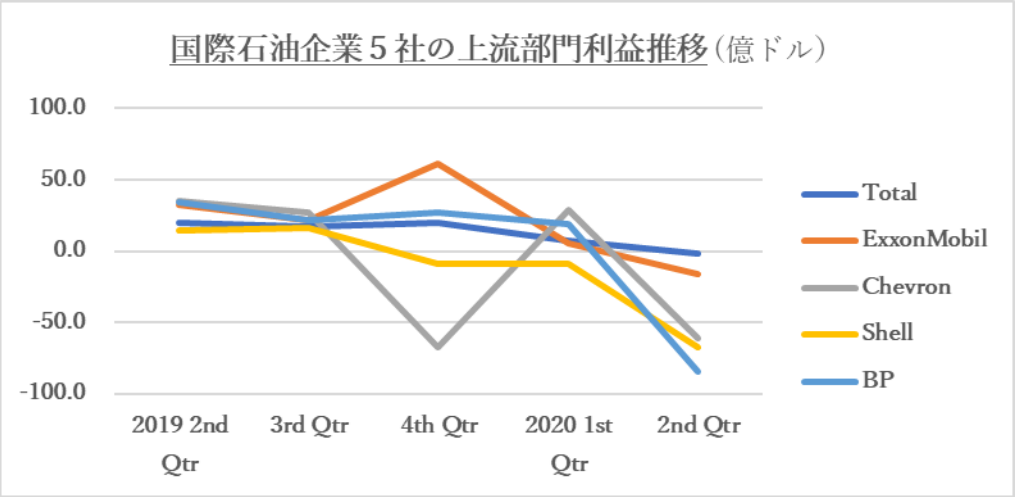
各社のその後の利益率の推移を見ると Chevron は11．1%('19 2nd Qtr)→7．1%(3rd Qtr)→▲18．2%(4th Qtr)→11．4%('20 1st Qtr)→▲51．9%(2nd Qtr)と激しいアップダウンを繰り返しており、Total は5．4%('19 2nd Qtr)→5．8%(3rd Qtr)→5．3%(4th Qtr)→0．1%('20 1st Qtr)→▲38．8%(2nd Qtr)であった。また ExxonMobil の利益率は4．5%('19 2nd Qtr)→4．9%(3rd Qtr)→8．5%(4th Qtr)→▲1．1%('20 1st Qtr)→▲3．3%(2nd Qtr)と推移した。Shell は3．3%('19 2nd Qtr)→6．6%(3rd Qtr)→1．1%(4th Qtr)→0．0%('20 1st Qtr)→▲55．8%(2nd Qtr)であり、BP は及び2．5%('19 2nd Qtr)→▲1．1%(3rd Qtr)→0．0%(4th Qtr)→▲7．3%('20 1st Qtr)→▲53．2%(2nd Qtr)と

低空飛行を続けた末に今期の利益率は大きなマイナスとなった。

ExxonMobil の利益率は比較的安定していたが、その他の4社は振幅が大きく、特に今期は前期比で50%以上下落した企業が5社中3社を占めており、記録的に悪い決算となっている。

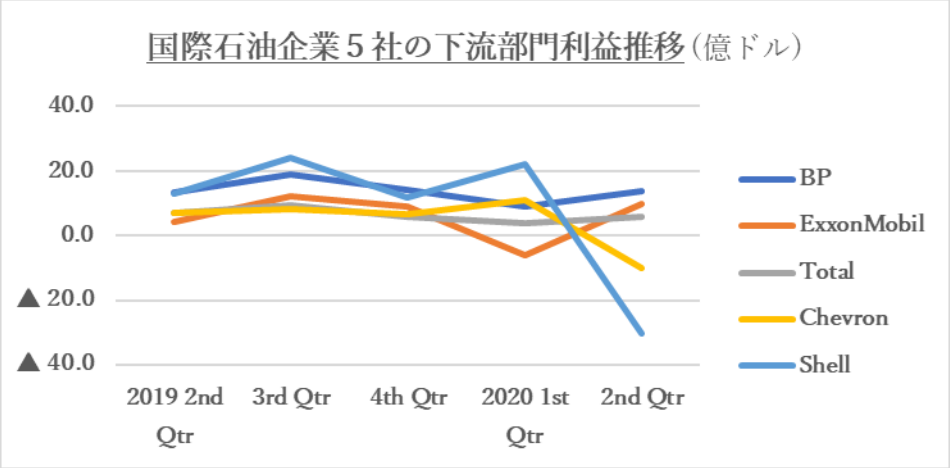
（4）部門別利益の推移

（4－1）上流部門



前年の2019年第2四半期の上流部門の利益は Chevron、BP 及び ExxonMobil が33～35億ドルで並び、Total が20億ドル、Shell は5社の中で最も少ない14億ドルであった。第3四半期も引き続き全社がプラスであった。第4四半期は大きく変動し、Chevron が67億ドルという巨額の赤字を計上し一気に最下位に転落した。一方 ExxonMobil の利益は61億ドルに急伸し5社の中で上流部門の利益トップに立った。2020年第1四半期は Chevron の利益が急回復しトップに返り咲き、ExxonMobil は利益が一桁台の5億ドルに減少し、BP 及び Total を下回った。今期は上流部門の利益が急減、5社すべてがマイナスとなった。中でもBP は▲85億ドルの大幅な赤字となり、Shell 及び Chevron も▲60億ドル台のマイナスを計上、Shellの上流部門は3期連続でマイナスになっている。

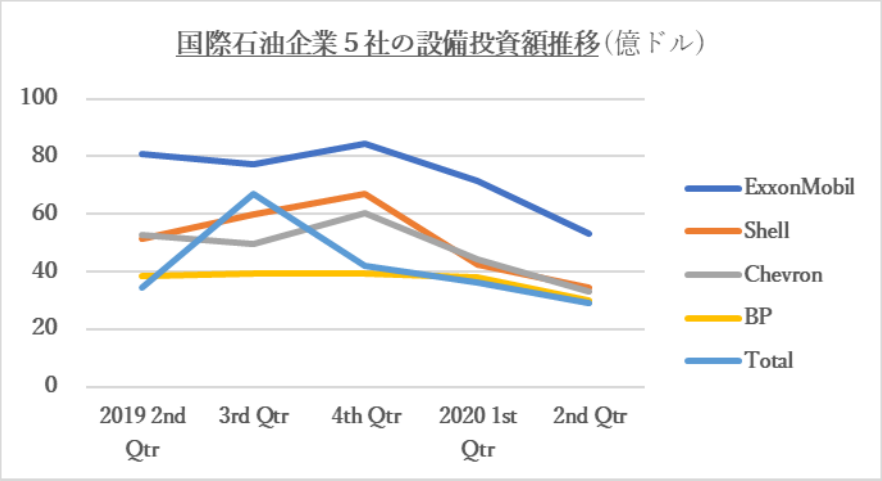
（4－2）下流部門



2019年第2四半期の各社下流部門の業績は全社黒字であったが黒字幅は小さく、BP、Shell が

１３億ドル、Total、Chevron が7億ドル、ExxonMobil は4億ドルにとどまった。第3四半期、第4四半期も各社とも下流部門は黒字を維持した。しかし今年第１四半期は各社で明暗が分かれ Shell が2２億ドルの利益を計上した一方、ExxonMobil は6億ドルの赤字であった。続く今年第2四半期は、BP、ExxonMobil 及び Total3社が前期を上回る利益を計上する一方、Shell と Chevron2社は前者が▲３０億ドル、後者が▲１０億ドルの大きな損失を出している。

（5）設備投資の推移

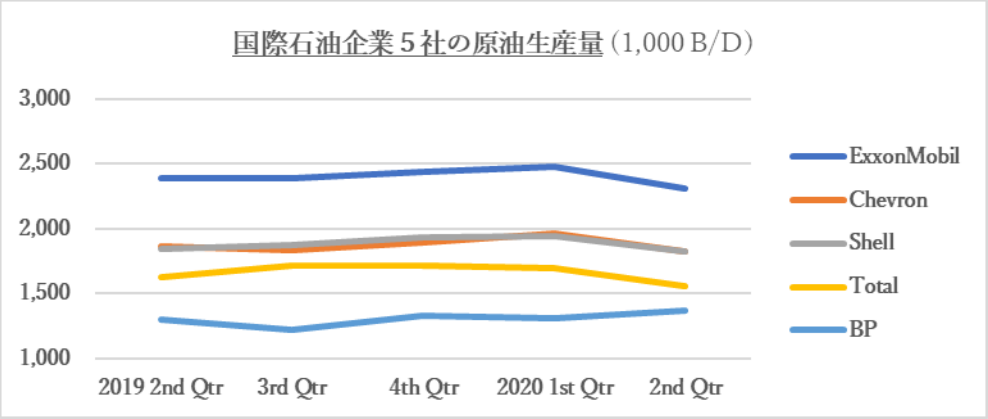


５社の四半期ベースの設備投資額は ExxonMobil が毎期最も多くの投資を行っている。同社の各期の投資額は８１億ドル(’19 2nd Qtr)→７７億ドル(’19 3rd Qtr)→８５億ドル(’19 4th Qtr)→７１億ドル(’20 1st Qtr) →５３億ドル(2nd Qtr)であった。

同社に次ぐ投資を行っているのは Shell であり、その金額は５２億ドル(’19 2nd Qtr)→６０億ドル(’19 3rd Qtr)→６７億ドル(’19 4th Qtr)→４３億ドル(’20 1st Qtr) →３４億ドル(2nd Qtr)と推移している。Chevron の投資額は Shell とほぼ同じ水準を維持している。Total は昨年第３四半期こそ ExxonMobil に次ぐ６７億ドルの投資を行っているが、その他の四半期は BP とほぼ同じ、最も少ないレベルの３０～４０億ドル台である。

（6）原油・天然ガス生産量の推移

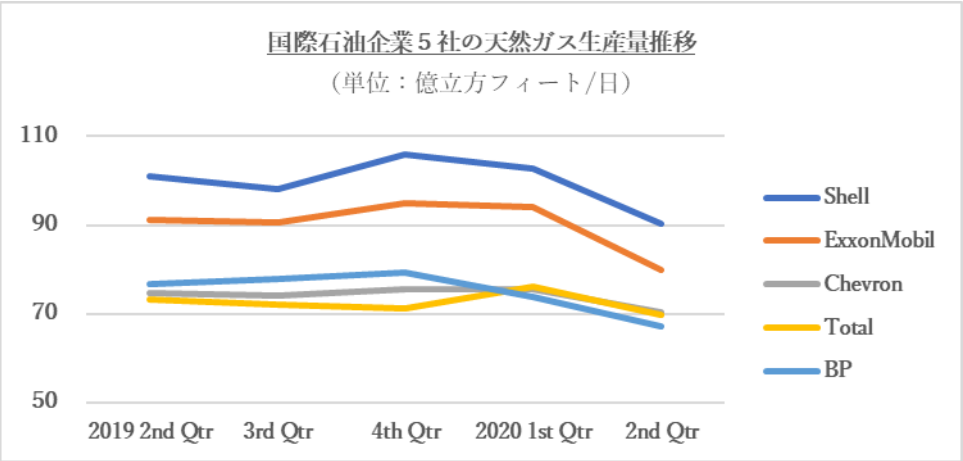
（６－１）原油生産量



過去１年間の四半期ごとの原油生産量の推移を見ると ExxonMobil が他社を引き離して５期連続

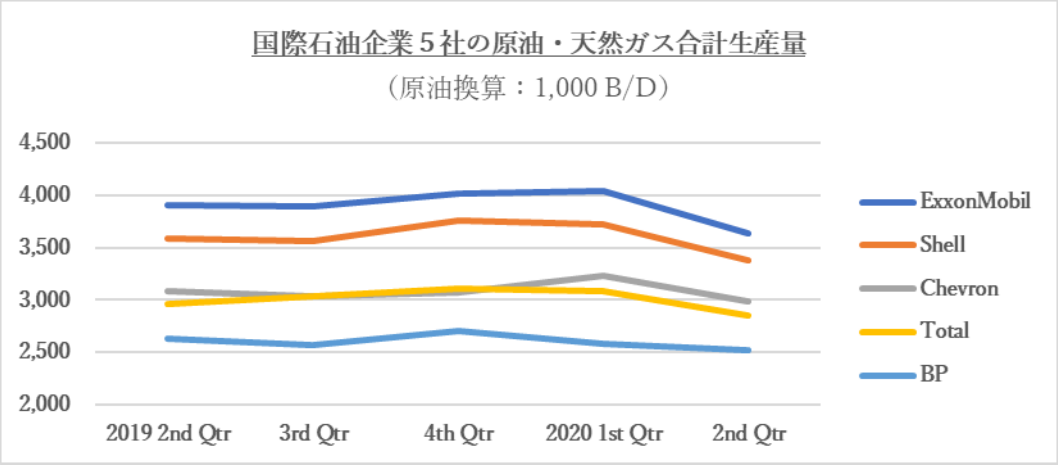
でトップを守っている。ExxonMobil の生産量は5社の中でただ1社200万 B/D 台を維持しており、今年第2四半期の生産量は231万 B/D であった。ExxonMobil に次ぐ二番手グループは Shell と Chevron であり、両社の生産量は共に180～190万 B/D 台である。両社の生産量は今年第1四半期まで増加傾向にあったが、今期は前期より10万 B/D 以上減少している。Total は2019年第3四半期172万 B/D をピークに減少を続け今期は過去1年間で最も少ない155万 B/D にとどまっている。BP は5社の中で原油生産量が最も少なく1 年前は130B/D でトップ ExxonMobil の6割であったが、その後は持ち直しており、今期は他社が軒並み減産する中で唯一増産を達成している。

(6－2)天然ガス生産量



天然ガスの生産量は Shell と ExxonMobil の上位2社と BP、Total、Chevron の下位3社の2グループに分かれている。Shell の過去1年間の生産量は101億立方フィート('19 2nd Qtr)→98億立方フィート(3rd Qtr)→106億立方フィート(4th Qtr)→103億立方フィート('20 1st Qtr)→90億立方フィート(2nd Qtr)であり、100億立方フィート前後を維持して5社のトップである。ExxonMobil も Shell とほぼ同様の軌跡をたどっており、両社の差は10億立方フィート前後で推移している。他の3社は5期を通じて生産量に大きな変化は無いが、今期は3社とも前期を下回っている。

(6－3)原油・天然ガス合計生産量(図 http://menadabase.maeda1.jp/2-D-4-65.pdf 参照)



天然ガスを石油に換算した原油・天然ガスの合計生産量の推移を見ると、生産量が最も多い ExxonMobil は石油換算で391万 B/D ('19 2nd Qtr)→390万 B/D(3rd Qtr)→402万 B/D(4th Qtr)

→405万 B/D('20 1st Qtr)→364万 B/D(2nd Qtr)である。これに次ぐ Shell は ExxonMobil よりも30万 B/D 前後少ない358万 B/D ('19 2nd Qtr)→356万 B/D(3rd Qtr)→376万 B/D(4th Qtr)→372万 B/D('20 1st Qtr)→338万 B/D(2nd Qtr)で推移している。

Chevron 及び Total の石油・天然ガス合計生産量は共に300万 B/D をわずかに上回る水準であったが、今期は両社とも300万 B/D を割っている。最も少ない BP の生産レベルは260万 B/D 前後で ExxonMobil 或は Shell の7割程度である。

(付) 国際石油企業3社(Shell、BP 及び Total) のキャッシュフロー

1. まえがき

キャッシュ・フロー(cash flow、現金流量)とは、現金の流れを意味し、主に、企業活動や財務活動によって実際に得られた収入から、外部への支出を差し引いて手元に残る資金の流れのことをいう。欧米では古くからキャッシュ・フロー会計にもとづくキャッシュ・フロー計算書(Cash flow statement, C/F)の作成が企業に義務付けられており、日本でも 1999 年度から上場企業は財務諸表の一つとしてキャッシュ・フロー計算書を作成することが法律上義務付けられている。

キャッシュ・フローは(1)営業キャッシュ・フロー(日常的な、生産・営業活動によって稼得する現金と、それに要する現金コストの収支)、(2)投資キャッシュ・フロー(工場新設やビル建設・トラック購入などの設備投資・有価証券投資に要する現金支払いと資産売却による収入)及び(3)財務キャッシュ・フロー(財務活動による現金の収支)の3種類があり、これらの総合収支が会計期間内の現金収支であり、期首(前期末)の現金(及び現金相当物)の残高に期間内の収支を加えたものが当期末の現金(及び現金相当物)となる。

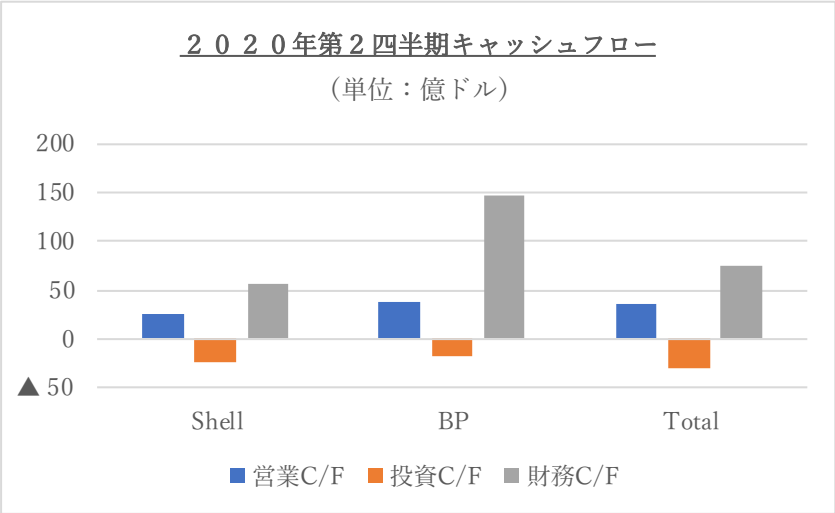
因みに上記項目の英語は Shell の決算書では以下のように表記されている。

営業キャッシュ・フロー:	Cash flow from operating activities
投資キャッシュ・フロー:	Cash flow from investing activities
財務キャッシュ・フロー:	Cash flow from financing activities
期間内収支:	Increase/(decrease) in cash and cash equivalents
期首残高:	Cash and cash equivalents at beginning of period
期末残高:	Cash and cash equivalents at end of period

五大国際石油企業の第2四半期決算書では、Shell、BP 及び Total は4－6月の3か月間のキャッシュ・フローが明示されているが、Chevron は1－6月の半年間のフローが表示され、また ExxonMobil は営業キャッシュ・フローのみの明記にとどまっている(なお毎年3月に公表される年間決算書では完全なキャッシュ・フロー・シートが公開されている)。

従って本稿では Shell、BP 及び Total3社の2020年第2四半期キャッシュ・フローに加え、3社の2019年第2四半期から今期まで5期の四半期の営業・投資・財務及び期末残高の各キャッシュ・フローの推移を見ることとする。

2. 2020年第2四半期のキャッシュ・フロー

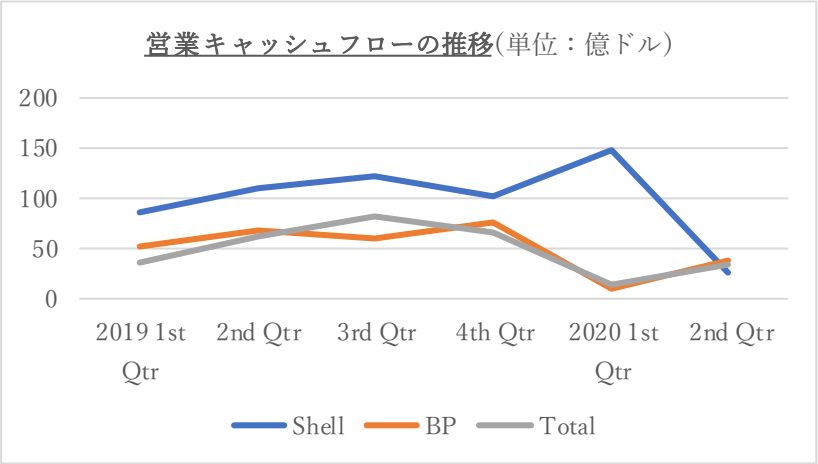


今期の3社の営業キャッシュ・フロー(以下 C/F)は BP が37億ドルで最も多く、次いで Total が35億ドル、Shell は3社の中では最も少ない26億ドルにとどまっている。今期は販売不振及び価格の低迷により売上、利益が大幅に落ち込み営業活動におけるキャッシュ・ジェネレーションも過去1年間で最低の水準に落ち込んでいる。

投資 C/F によるキャッシュの流出は Total29億ドル、Shell23億ドル、BP18億ドルであった。財務 C/F の収支はいずれも収入超過であり、その額は BP が147億ドル、Total75億ドル、Shell57億ドルである。後述するように過去1年間の財務 C/F は今期以外すべて現金(及び現金相当)支出が収入を上回っている。財務 C/F は借入金の支払い金利、借入金の返済あるいは新規借入で構成され、通常、投資が少ない時は既存借入金を返済し、新規借入を控えて財務の健全化を図ろうとすることが多いが、今期は各社とも新たな借入により手許現金を厚くしている。売り上げの激減に直面し、しかも早急な回復が見込めないため、各社とも運転資金の不足に備えている様子がうかがえる。

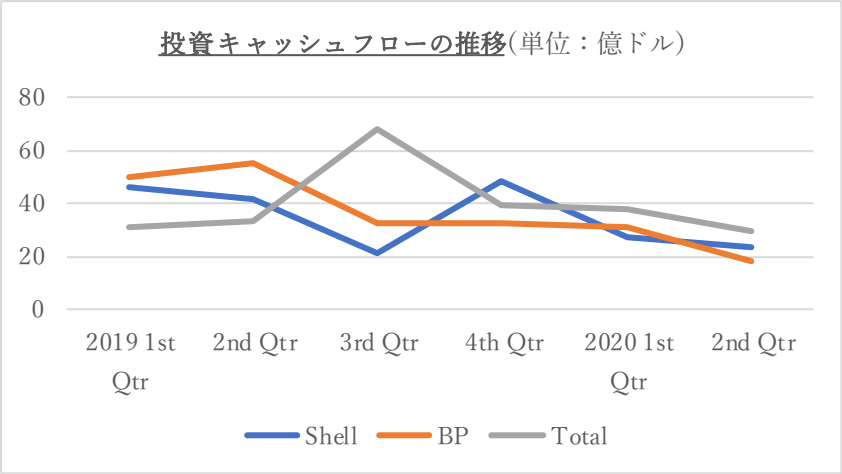
3. 2019年1月以降のキャッシュ・フローの推移

3－1. 営業キャッシュ・フロー



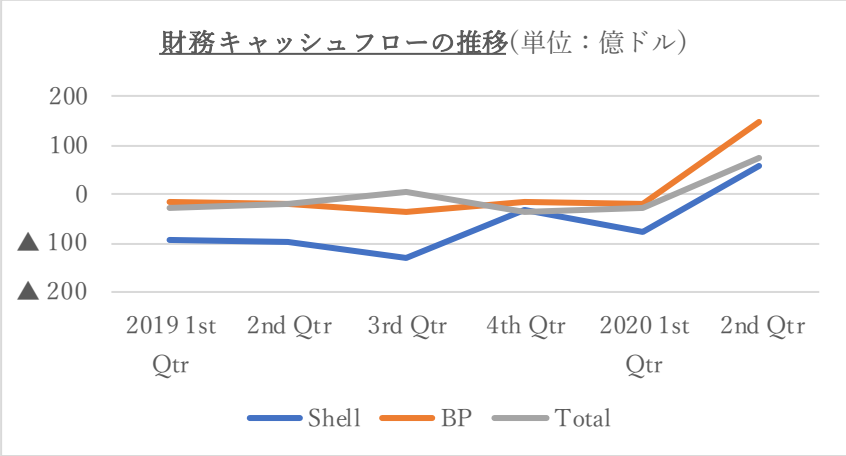
2019年1－3月の各社の営業 C/F は Shell が86億ドルと最も多く、BP は53億ドル、Total36億ドルであった。その後昨年末までは3社とも増加する傾向にあり、Shell は毎期100億ドル以上、BP 及び Total は60～80億ドルキャッシュを生み出している。今年1-3月期は明暗が分かれ、Shell の営業 C/F は150億ドル近くに達したが、BP と Total は10億ドル強に急減した。4-6月期には上述のとおり3社の C/F はいずれも30億ドル前後であり、Shell の急落が顕著である。

3－2　投資キャッシュ･フロー



2019年1-3月の投資 C/F は BP が50億ドル、Shell46億ドル、Total は31億ドルであった。BP は同年4－6月の55億ドルをピークに毎期減少し、今年4－6月期は18億ドルに下がっている。Shell の投資 C/F は第3四半期に21億ドルまで減少した後、第4四半期には49億ドルに回復したが、続く2020年第1及び第2四半期は連続して減少し今期は23億ドルであった。Total の投資 C/F は昨年10－12月期に68億ドルに達したが、その後は連続して減少している。3社に共通しているのは昨年10-12月期以降、投資を抑制していることである。

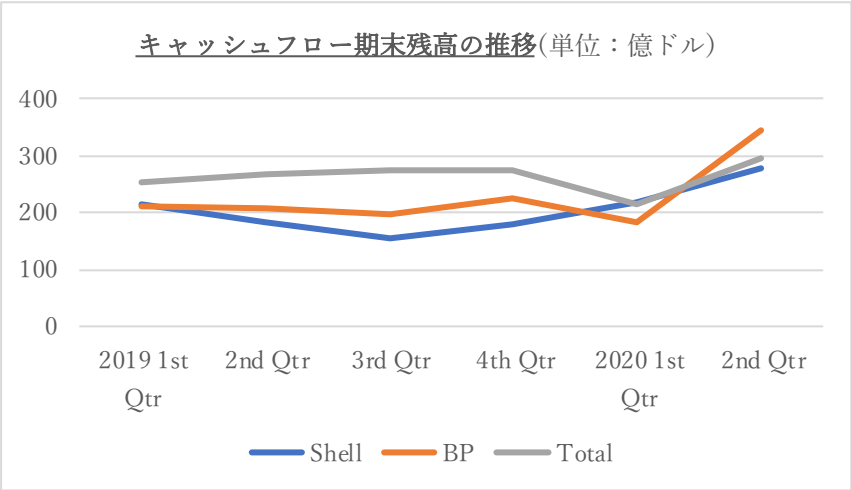
3－3　財務キャッシュ･フロー



3社の財務 C/F は昨年1－3月期から今年1-3月期までほぼ横ばいであったが、今期(4-6月期)にそれまでのマイナスから一挙大幅なプラスに転じたことが大きな特徴である。即ち各社とも今期に多額の新規借入を行ったことである。

Shell の財務 C/F は昨年1－3月期は▲93億ドルであり、その後多少の増減はあったものの、今年1－3月期は▲78億ドルであった。しかし今季は一挙に57億ドルのプラスに転じ前期との差は135億ドルに達している。BP も Shell と同様昨年1—3月期から今年1－3月期までは▲20～40億ドルの水準であったが、今期は3社中最も多いプラス147億ドルであり前期との差は170億ドル弱である。Total も今年1-3月期まで BP とほぼ同じ軌跡をたどり、今期は Shell を若干上回る75億ドルのプラスであった。

３－３　キャッシュ･フロー期末残高の推移



各四半期の営業 C/F、投資 C/F 及び財務 C/F を差引した期末残高の推移を見ると、昨年３月末の残高が最も多かったのは Total の254億ドルで、Shell 及び BP はそれぞれ２１５億ドル、２１３億ドルで並んでいた。その後の各社の期末残高はいずれも大きな変動はなく、今年の３月末残高は Shell２１８億ドル、Total２１６億ドル、BP１８１億ドルであった。しかし今年６月末は各社とも大幅に増加しており、BP の残高は2倍近い３４７億ドルである。Total、Shell の残高もそれぞれ２９７億ドル、２７９億ドルと前期末に比べ大きく膨らんでいる。各社ともコロナウィルにより業績が急落しており、手許現金の不足に備えたものとみられる。

以上

本稿に関するコメント、ご意見をお聞かせください。

前田　高行　　〒183-0027 東京都府中市本町 2-31-13-601
Tel/Fax; 042-360-1284, 携帯; 090-9157-3642
E-mail; maeda1@jcom.home.ne.jp

1-D-4-22

2020 年 4-6 月期国際石油企業の業績

年		ExxonMobil	Shell	BP	Total	Chevron
売上高(百万ドル)	今期(4-6 月)	32,605	32,491	31,676	21,562	15,926
	前期(1-3 月)	56,158	60,959	59,650	38,577	29,705
	増減(%)	-41.9%	-46.7%	-46.9%	-44.1%	-46.4%
	前年同期(4-6 月)	69,091	91,838	72,676	45,202	36,323
	増減(%)	-52.8%	-64.6%	-56.4%	-52.3%	-56.2%
総合損益(百万ドル)(＊)	今期(4-6 月)	▲ 1,080	▲ 18,131	▲ 16,848	▲ 8,369	▲ 8,270
	前期(1-3 月)	▲ 610	▲ 24	▲ 4,365	34	3,599
	増減(%)	77.0%	75445.8%	286.0%	-24714.7%	-329.8%
	前年同期(4-6 月)	3,130	2,998	1,822	2,756	4,305
	増減(%)	-134.5%	-704.8%	-1024.7%	-403.7%	-292.1%
上流部門損益(百万ドル)(＊)	今期(4-6 月)	▲ 1,651	▲ 6,721	▲ 8,487	▲ 209	▲ 6,089
	前期(1-3 月)	536	▲ 863	1,871	703	2,920
	増減(%)	-408.0%	678.8%	-553.6%	-129.7%	-308.5%
	前年同期(4-6 月)	3,261	1,435	3,413	2,022	3,483
	増減(%)	-150.6%	-568.4%	-348.7%	-110.3%	-274.8%
下流部門損益(百万ドル)(＊)	今期(4-6 月)	976	▲ 3,023	1,405	575	▲ 1,010
	前期(1-3 月)	▲ 611	2,211	921	382	1,103
	増減(%)	-259.7%	-236.7%	52.6%	50.5%	-191.6%
	前年同期(4-6 月)	451	1,299	1,365	715	729
	増減(%)	116.4%	-332.7%	2.9%	-19.6%	-238.5%
売上高利益率(%)	2020 年 1-3 月	-3.3%	-55.8%	-53.2%	-38.8%	-51.9%
	前年同期	4.5%	3.3%	2.5%	6.1%	11.9%
設備投資(百万ドル)	今期(4-6 月)	5,327	3,436	3,018	2,922	3,306
	前年同期(4-6 月)	8,079	5,150	3,833	3,430	5,288
	増減(%)	-34.1%	-33.3%	-21.3%	-14.8%	-37.5%
原油生産量(1,000B/D)	今期(4-6 月)	2,306	1,820	1,366	1,553	1,824
	前年同期(4-6 月)	2,389	1,842	1,301	1,624	1,863
	増減(%)	-3.5%	-1.2%	5.0%	-4.4%	-2.1%
ガス生産量(100 万 cfd)	今期(4-6 月)	7,990	9,041	6,725	7,045	6,986
	前年同期(4-6 月)	9,120	10,096	7,680	7,477	7,327
	増減(%)	-12.4%	-10.4%	-12.4%	-5.8%	-4.7%
同石油換算(1,000B/D)	今期(4-6 月)	1,332	1,559	1,159	1,293	1,164
	前年同期(4-6 月)	1,520	1,741	1,324	1,333	1,221
	増減(%)	-12.4%	-10.5%	-12.5%	-3.0%	-4.7%

原油・ガス合計生産量 （石油換算 1,000B/D）	今期(4-6 月)	3,638	3,379	2,525	2,846	2,988
	前年同期(4-6 月)	3,909	3,583	2,625	2,957	3,084
	増減(%)	-6.9%	-5.7%	-3.8%	-3.8%	-3.1%

＊総合損益には石油化学部門あるいはその他の損益を含むため、上流部門・下流部門損益の合計額とは一致しない場合がある。